

今までを振り返って ～編集委員の思い～

増田 武司 (編集委員長)

8年間のかわら版の取材を通して、多くの人と接することができました。

印象に残っている記事は、「おらが街の芸術家」や「趣味で矢板を盛り上げる」、「矢板の元気印」です。これらの企画では、個人の方に話を聞きましたが、矢板にはこんなに多くの方が優れた趣味や特技を持っているんだ、と驚きました。

そして、記事の企画に当たっては「市民力の発掘と応援」を基本コンセプトとしているので、“市民力”という枠内での情報集めが大変でした。いろいろ苦労もありましたが、多くの人に知り合うことができたので、かわら版記者を引き受けて良かったと思っています。取材に協力いただいた方々に、改めてお礼を申し上げます。有難うございました。



仲島 寿一 (カメラマン)

私は、8年前の創刊号からカメラマンとして、参加させていただきました。創刊号から4号までは、墨一色の手作りかわら版でした。取材はもとより、編集・割り付け・ページ立て、行政区への配布仕分けなど、今になれば楽しいひとときでした。5号よりカラー印刷になり、紙面がにぎやかに。「矢板の希望の星」などのコーナーが誕生しました。

取材の中で、矢板にはいろんな趣味を持っている人がいることを知りました。何年もかけて五重の塔を作った人がいたり、ひょうたん細工が家の中にいっぱいの人、大小の盆栽の鉢でハウスいっぱいの人など、私には到底できないことです。趣味には奥の深い世界があります。かわら版に関わったからこそ、知ることができました。

趣味を持っている方は、話を聞いている時など、目の輝きが違いますね。私も何をやろうかな…。



熊田 玲子

私の少女時代の夢は、雑誌記者になることでした。ですから、市民の手による「かわら版」の存在を知ってすぐに参加させていただきました。平成20年の5月号からですから、もう8年近くになるんですね。あつという間の気がします。

私の中で心に残っているのは東日本大震災の取材をした時でした。電気も水もない中で携帯電話の無料充電をされた話を伺いに行っただのですが、思いがけない人との出会いや被災地まで苦労して物資を届けに行っただ話なども聞け、とても感動しました。

また、子育てと介護のシリーズを担当したのですが、介護の取材では大変な思いでいる方の本音まではお聞きできないもどかしさも感じました。

取材に快く応じてくれた皆様と一緒にやってきた仲間たち、支えてくれた職員の方に感謝です。



星野 邦子

かわら版の写真主に担当している仲島さんに誘われ、記者になりました。誘われたのは、矢小新聞の広報部の役員になり、一緒に記事を作っていた経験があったからだと思います。

平成23年4月から記者になり、初めての記事を書くことになったのが、東日本大震災の時に市民力を発揮した人たちのことでした。

自分なりに、高橋フーズの社長さんにたくさん質問して記事を書きましたが、何度も先輩記者にダメ出しをされ、さらに詳しくインタビューしました。読者にわかりやすく、正しく伝えるのに苦勞しました。先輩記者に感謝です。

初めて会う人や今まで面識のある人に、インタビューという形で話を聞き、それを文章にし、活字になるのが、すごく面白くやりがいがあり、良い経験でした。この経験を今後の人生に役立てたいと思います。



渡辺 美恵子

一読者であった私が編集委員となり、2年半が過ぎました。

創刊号刊行から、「市民力かわら版」に興味を持っていましたが、自信がなかったので、入るのをためらっていました。ある時、市民記者の方から声を掛けていただいて、思い切りました。

参加してみて、何より自分にはない気付き、的確なアドバイスももらえて、嬉しかったです。尻込みしている私をぐんぐん引っ張ってくれたので、メンバー内に溶け込むことができました。

毎号の話題を発見・発掘し、何事も記事にしてしまう「すぐ技」にいつも感心するばかりでした。一生懸命ついていくのが精一杯でしたが、無事最終号を迎えることができたのは、メンバーのおかげです。感謝しています。



白石 哲夫

かわら版記者になって、1年目の駆け出しです。目下、先輩方から記事の書き方や取材のノウハウについて、いろいろご指導を得ているところです。

この1年間に、直接・間接的に10名の方に取材をさせていただきました。皆さんそれぞれ健康で前向きで、そして何よりもこの矢板市をこよなく愛されている方ばかりで、こちらも嬉しくなっていました。同時に、市民力が浸透し、根付きつつあることを、肌で感じ取った次第です。

昔、ある学者から「自治能力を持った市民が多ければ多いほど、行政コストは安くなる」と聞いたことがあります。これがまさに市民力であると思っています。いかがでしょうか。

